

NARIWA MUSEUM

高梁市成羽美術館 だより

NO.37◆2021.3

編集・発行：高梁市成羽美術館
〒716-0111 岡山県高梁市成羽町下原1068-3
TEL 0866-42-4455 FAX 0866-42-4451
<https://nariwa-museum.or.jp/>



止宿先ホテル・シュヴィヨンの自室で鏡に向かう児島虎次郎自写像
グレー村, フランス, 1908年

没後90年記念 児島虎次郎 —もうひとつの眼

2020年4月4日[土]—8月23日[日]



会場風景

児島虎次郎は、5年間のヨーロッパ留学の後にも2度渡欧し、その都度愛好のカメラで沢山の写真を撮っています。それらの貴重な写真は、今日までご遺族の手によって大切に守られてきました。この度の「児島虎次郎 —もうひとつの眼」展は、当初この貴重な資料である写真を何とか後世に伝えるべく写真集を作るといふ話から始まりました。

折しも前年に児島虎次郎没後90年を迎えて、その記念展として開催を計画しましたが、



記念対談『児島虎次郎の旅とその記録』
児島塊太郎氏(左)と大原謙一郎氏(右)



6月7日(日) 記念講演会『児島虎次郎の生涯と功績』
松岡智子氏(倉敷芸術科学大学教授)



定価 ¥2,500(税別)
当館ウェブサイトより
通信販売も承ります

写真は既に著しく劣化が進行したのももあり、時間的猶予は許されない状況でありました。数百枚の写真の中から展示する100枚を選ぶことは困難を極めました。選ばれた一枚一枚の写真からは撮影した児島本人の気持ちや美意識がうかがえて大変興味深いものでした。

展示にはそれらの写真に関連の絵画作品約20点を加えて、総展示数120点の規模となりました。また、エジプトでの写真コーナーには、児島が収集したエジプトの古美術品も展示して彼の偉業を偲びました。

開幕から間もなく、新型コロナウイルスの影響で休館を余儀なくされ、約一か月後に再開したものの来館者数の減少に困窮

することとなりました。夏に予定していた展覧会を延期して、当初6月21日までの会期を8月23日まで延長し観覧機会を増やして対応しました。

会期中には、倉敷芸術科学大学の松岡智子先生による児島の画業とその功績についての記念講演会を開催、また、孫の児島塊太郎氏と大原美術館名誉館長大原謙一郎氏による対談を収録して古備ケーブルテレビなどで放映しました。

製作した写真集には、展示した100枚の写真と共に絵画作品24点、絵葉書8葉、松岡先生の論考、そして児島虎次郎と友人の齋藤豊作、山下新太郎の書いた『田園日記』を掲載しました。この写真集は全国の書店で販売され、多くの方に画家児島虎次郎の存在と、彼のもつ「もうひとつの眼」の素晴らしさを知っていただく機会になったのではないかと自負しています。47歳という年齢で亡くなった児島虎次郎の多彩な才能と業績をこれからも顕彰していきたいと思えます。

表紙解説

「鏡の中の虎次郎」

児島虎次郎は1908年1月、神戸港から初めて渡欧。長い船旅の末、憧れのパリに到着しますが、下宿先が決まった夜に急性腸チフスで入院します。

約2カ月後に退院した虎次郎は、療養と制作のためにパリの喧騒から離れることを望みます。近代洋画壇の巨匠黒田清輝も滞在したパリ郊外のグレー村に赴き、小さなホテルに泊まりました。虎次郎は村を気に入り、約1年間過ごして数多くの作品を残しました。

写真は、グレー村の止宿先オテル・シュヴィヨンで鏡に映った自分を撮影したものです。鏡の中の瞳には、まさにこれから画家を志す強い決意さえ感じることができず。おそらく虎次郎が残した最も古い1枚だと思います。鏡に映った自分とカメラを被写体にする撮影法は、虎次郎の得意とする技で、他にも数枚見ることができず。

成羽町美術振興財団

理事長 児島塊太郎

フォトコンテスト 成羽美術館と、シャシン。

「児島虎次郎ーもうひとつの眼」展期間中、関連イベントとしてインスタグラム上でのフォトコンテスト「成羽美術館と、シャシン。」を開催しました。

100件を超える投稿の中から、グランプリ1名、準グランプリ1名、特別賞3名が決定しました。たくさんのご応募をいただき誠にありがとうございます。当館スタッフも唸る！受賞作品は次の通りです♪



グランプリ

金谷哲郎彫刻からのぞき込む構図の斬新さ、効果的な色彩が賞の決め手になりました。ぜひ、またみなさんで、来館くださいね☆



Natsu(@blue_soryu)様

●特別賞



備中成羽 最上稲荷 松山山 本光寺 (@shououzan_honkouji) 様

●準グランプリ【館長お気に入りで賞】



【モノトーンカッコイイで賞】
Mayu Fujita (@ma_yuma_yu) 様



【モネの睡蓮綺麗で賞】
瀬戸内と備中♡備後の
いとこ見つけ隊(隊員1名)
(@urajya) 様



【化石の模様綺麗で賞】
kazuyoshi.inukai
(@kazuyoshi.inukai) 様

特別展示 金谷哲郎彫刻 《メビウス(無or無限)I》

昨年秋から美術館の流水の庭に置かれた「紅いメビウス」が入館者の注目を集めてきた。金谷哲郎先生の代表作《メビウス(無or無限)I》である。

設置期間はこの3月末で終わりを迎える。この作品が池の中に置かれたのは、2003年の個展以来かれこれ十数年ぶりで、金谷先生たつての願いで実現した。お世話いただいたのは岡山市内にある石材店の浮田隆司さんである。

この冬の正月明けのある日、成羽が氷点下7度という寒さの中に池が凍り雪が積もって、紅いメビウスは一段と美しく輝いて見えた。周囲の静けさと相まって池に佇むメビウスがはらむ緊張感が、寒さの中で私の心に実に心地よい落ち着きをもたらしした。

水の中に浮かぶ紅いメビウス。メビウスの帯は「循環」と「再生」を象徴していると言われる。空から降り注ぐ雨が木々を潤し、水滴が川に流れ、川が元の海に集まってまた水蒸気と化して天に上る。そうしてすべての生命を育む。流水の庭に屹立する紅いメビウスを見ると自然や生命の循環と再生を思うのである。

美術館を訪れる方々は、駐車場から美術館2階の受付までゆっくりとスロープ

の坂道を登りながら、背後の山の緑に映える紅いメビウスに目を奪われる。自然の中に佇む現代的なコンクリートの安藤忠雄建築とこの作品との絶妙のコラボレーションを楽しんで展示会場へ誘われるのである。

金谷先生は石や鉄をはじめとする金属を素材に、初期の「貌」シリーズからこの「メビウス」まで数々の抽象作品を造り続けてきた県下最高齢の現役造形作家であり、この度の美術館での展示作品はここを訪れた人々の記憶に永くとどめられるであろう。

館長 澤原一志



児島虎次郎没後90年記念 白馬のゆくえ — 近代日本洋画の黎明

2020年9月5日[土]—11月29日[日]



会場風景

高梁市成羽美術館は秋、児島虎次郎没後90年を記念して「白馬のゆくえ — 近代日本洋画の黎明」展を開催しました。展覧会名にある「白馬」とは、1896(明治29)年近代日本洋画の黎明期に、ヨーロッパ留学から帰国した黒田清輝や久米桂一郎たちが結成した洋画団体「白馬会」を意味します。会の名はどぶろくの別称「しろうま」に由来しますが、この団体は既存の価値観に囚われない、ハイカラで勢いのあるまさに疾風のごとく駆け抜ける「白馬」の

ような団体でした。

明治初期にはまだ受容されていなかった裸体画を積極的に展覧したり、それまで「歴史的 주제こそ絵画のモチーフ」とされてきた考えから離れ、作者自身の考えや想いで、自由に絵画制作することを奨励したりと、白馬会は極めて新鮮な風を洋画界に吹き込みます。彼らもたらした新風は、若い画学生に非常に大きな影響を与えました。

当館で顕彰を進めている児島虎次郎も、その内の一人です。児島は黒田清輝に師事しており、黒田の勧めで東京府主催勸業博覧会や、作品の詳細は不明ですが、白馬会第九回展への出品歴も確認できます。

本展では、時代に翻弄されつつも自身の表現を探究し続ける児島の作品と、同時期に活躍した画家の作品を一堂に展示。白馬会がもたらした新風の「ゆくえ」を、現代に至るまでご紹介しました。

本展は巡回展で、香川県立ミュージアムを皮切りとし、福岡の久留米市美術館、そして最終会場が成羽美術館でした。会期中10月4日には、白馬会の後続団体である光風会所属の画家 関野智子先生を講師にお招きし、こころの色を探すワークショップ「光は色彩へ・色彩は心へ」色と形で伝えよう」を開催。また、10月25日には岡山大学大学院教育学研究科教授 赤木里香子

先生による記念講演会「洋画家たちの学びと歩み — 美術教育との関わりを中心に」を開催しました。

コロナ禍の影が色濃く出始めた矢先のスタートとなりましたが、皆様のおかげで会期を全うすることができました。本展の開催にあたり、貴重な作品をご出品いただきました所蔵者の皆様、ご協力いただいたさまざまな関係各位に深く感謝の意を表します。

ワークショップを終えて

関野智子

表現するということはどういうことなのか。これまで人類は多くのものを遺し、その表現は時代や生活様式と共に常に揺れ動いています。本展覧会にはまさに日本が大きく揺れ動いた時代の作品が並び、色彩への目覚めや自分の考えを伝えようとする情熱が強く感じられる内容でした。

本ワークショップでは展覧会内容をより深く味わっていただくため、白馬会作品の特徴を踏まえ「色への感覚を研ぎ澄ませイメージを伝えること」をねらいに、



受講者作品 ～3月のイメージ～



関野智子《空にひらく》2020年

①色をつくる②色と色の組み合わせからイメージを見立てる③色に形を与えイメージを伝える活動を行いました。ウォーミングアップを兼ねた演習の後に「生まれ月のイメージ」のカラーージュ作品を制作。活動は3時間を超過しましたが、皆さん最後までこだわりを持って取り組み、素晴らしい力作が揃いました。

これは作家としての自身への戒めでもあるのですが、刺激的なビジュアルイメージに囲まれ、様々な素材や表現技法が確立された現代だからこそ、材料やモチーフを意志をもって選ぶこと・自分の内なる声に従い感覚を研ぎ澄ませていくことが重要であるように感じています。今回の自分の心の声や身体記憶を辿りながらの制作や、お互いの作品を鑑賞し意見を交わす時間が、皆さんにとって充実した美術体験として心に残れば幸いです。そして、白馬会やそこからつながる作家たちが自分の表現を求めて生命を煌めかせていたこと、表現はいつ・どこからでも始められるというのを、心に留めていただくと嬉し

画家光風会会員 関野智子

記念講演会

「洋画家たちの学びと歩み

—美術教育との関わりを中心に—(抜粋)

赤木里香子

1896(明治29)年6月6日に白馬会が結成され、以後1911年まで13回の展覧会を重ねていきます。

中略

1893(明治26)年、黒田清輝は約10年のフランス留学を終えて帰国しました。彼を待っていたのが山本芳翠です。滞欧中に彼の画才を認め、画家をめざすよう応援した山本は、帰国後、木口木版画家の合田清と一緒に主宰していた画塾「生巧館」を、黒田が帰ったら譲ろうと以前から決めていたのです。翌年、この画塾は黒田の手で「天真道場」という新しい洋画学習の場に生まれ変わりました。

ここに集まった若い画家たちは、工部美術学校あるいはその前の様々な画塾で育った人たちや、日本初の洋画団体である明治美術会の人たちとはそりが合わなかったように、表現においても大きな変化が見られました。会場で、安藤伸太郎や原田直次郎らとその後作品を見比べてください。脂



派、旧派と呼ばれる人たちの茶色っぽい画面と、影の部分に黒や灰色ではなく紫色を使う紫派、新派と呼ばれる人たちの光を感じさせる画面と、その違いは一目瞭然でしょう。

熱気とエネルギーに溢れた白馬会は、世間の注目の的でした。最初の展覧会を祝う会では、山本芳翠が自分の大きなお腹に白い布で出来た馬の首のハリボテのようなものをくりつけて登場し、美術解剖学の先生に解剖させるふりをしながら布をほどこいて早変わり、すると中から「白馬会万歳」と書いた提灯が出てきて座がドツと沸いた、といった宴会の余興の様子まで、新聞記事に書かれています。山本は明治美術会メンバーで旧派に近い立場でしたが、白馬会にも入り、その活動を大いに盛り上げていたようです。

かつて黒田に画塾を譲る話をしながら、山本は「お天道さまが出たら、行燈はいらんくなるよ」と語りました。今回の展覧会のサブタイトルは「近代日本洋画の黎明」。黎明とは曙、夜明けを指します。夜が白々と明けてきて、まだ太陽は昇っていないけれども物の形がはっきりと見える、そんな時期があります。しかし、太陽の光が差し込んだ瞬間に何もかもが変わる。本当の朝が来る、ということなのです。白馬会の出現によって同時代の人々は、その時がきたのだとよく分かったのではないかと思います。

岡山大学大学院教育学研究科

教授 赤木里香子

今年のテーマは久々に古代エジプト!
岡山県立大学とのコラボグッズ開発
「古代エジプト物語
Season2」

すっかりお馴染みになった、岡山県立大学デザイン学部造形デザイン学科3年生とのオリジナルグッズ開発は、今年でもう7回目。今回は児島虎次郎が蒐集した古代エジプトコレクションをモチーフに製作しました。本年はコロナ禍により大学が休校し、製作期間が短くなったうえ工房が自由に使えなくなるなど非常に厳しい状況だったにも関わらず、学生たちは情熱を失うことなく製作に励んでくれました。それぞれの強い想いと独創的なアイデアが込められた作品の数々は、どれも感動を覚えるレベルでした。

定番の絵葉書やTシャツのほか、アヌビス神の醤油差し、シャブティ(お墓に入れる身代わり人形)のつま楊枝入れなどいつものラインナップとはひと味違うものもあり、まさにバラエティ豊かなグッズがショップに並びました。さらに今年には「静水の庭」前ロビーにて、グッズとそのモチーフとなった古代エジプト遺物を並べて展示し、遺物の意味とグッズの製作意図を皆さまにご覧いただけるようにしました。

ミュージアムグッズは、資料がもつ意味をうまく具現化して、さらに館独自の思い出の品となるように作らなければなりません。学生たちがそのような難しい目標を軽々と達成してしまうことに毎年驚かされるばかりです。

来年度は「児島虎次郎」をテーマに取り組みます。どうぞご期待ください!



コラボグッズの一部



製作の様子



ロビーでの展示風景

岡山県芸術文化育成・支援事業

北川太郎「空間ポエム」

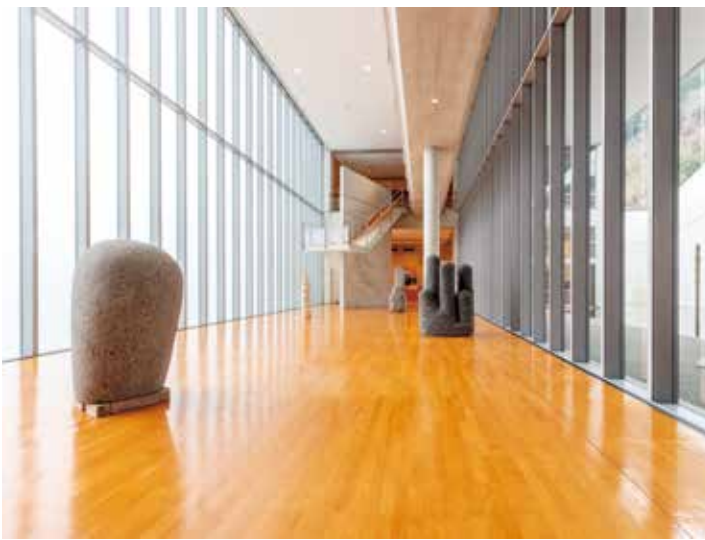
2020年12月12日「土」―2021年2月7日「日」

光の中

北川太郎

始まりはフェイスブックのメッセージに届いたメッセージからだ。思い起こせば初めから不思議な光に包まれていた様に感じる。真鶴で巨石を彫っていた最中、「美術館で個展をしませんか？」との連絡に驚いた。石彫の個展なんて搬入出も大変だし、来館者だって多くは望めない。こんな有り難い話はない。勿論二つ返事で快諾であるが、本心を明かすと、元来小心者の私は狐につままれた様な気持ちだった。しかし、学芸員さんから次々に届く「助成金取れました。」「好きなように空間を使って下さい。」などなど、前向きな全ての言葉がぼんやりとしていた展覧会の輪郭に光を与えているように感じられた。

「空間ポエム」ちよつと背伸びして付けたタイトルの展覧会に、作品が存在することにより周りの魅力を引き出すことを試みた《静けさ》、時間の可視化を試みた《時空ピラミッド》、アングス高原のまっただ中でじつくりと時間をかけて制作した《厚みある時間》計8点を野外や室内、そしてその中間的な空間に展示した。冬の雲間に差す光、池の水面の反射光、赤みがかつた夕暮れ時の光、薄曇りのぼんやりとした光、そこには様々な光がある。どれも確かな光だ。確かな光の中で自分の作品を見ている時間は僕にとって至福のひとつである。



岡山県芸術文化育成・支援の委託事業として、高梁市成羽美術館では冬、新進気鋭の作家2名による個展を同時開催しました。

北川は兵庫県姫路市出身の石彫家で、2000年金沢美術工芸大学彫刻専攻卒業後、2007年愛知県立芸術大学大学院彫刻専攻を修了。2007年から2010年にかけて文化庁新進芸術家在外研修員(3年派遣員)としてペルーに滞在、2013年第6回「I氏賞」奨励賞を受賞しています。国内外で精力的な活動を続けている作家で、徹底して手仕事にこだわり作品制作をしています。

そして李は韓国出身のファイバーアーティストで、2015年に倉敷芸術科学大学大学院芸術研究科博士課程を修了。同年、加計美術館(岡山)にて個展「境を撫でる者」を開催。2018年には第11回「I氏賞」大賞を受賞。布や糸といった繊細な素材を使い、叙情的なインスタレーション作品を展開しています。

二人は、じつくりと膨大な時間をかけて素材と自己に向き合う作家です。「速い」ことが価値とされている現代ですが、作家のひたむきな制作姿勢を見ると、果たして本当に「速い」ことは良いことなのか、今まさに再見したくなります。

現代の情報伝達のスピードは目を見張るものがありますが、急速に広まった情報の中には、不穏な噂や不確かな情報も多く、それらに惑わされる弊害もあります。反対に時間をかけることによって、見えるものがあるのではないのでしょうか。

二人の作品は、完成したものを観るだけではなく、そこに至るまでの時間やプロセス、作り上げていくという「行為」を感じることが出来る作品でした。時間をかけて対象と向き合うその姿勢に気づいた時、固定観念と

岡山県芸術文化育成・支援事業

李侖京「小舟によせる唄」

2020年12月12日「土」—2021年2月7日「日」

ある場所に流れた物語

李侖京

時は冬の最中、それに相応する寒さが人々の肩を自然と丸くさせている。コンクリート打ちの頑丈な建物はその冷たい空気を余すところなく吸い込んでいる気がする。幸い壁一面を成している大きな窓ガラスから流れてくる日差しに温もりを感じる。

光がある物体にぶつかって、銀色を放っていることに気付かされる。足元や天井まで繋がる柱、薄暗い奥へと誘う細い通路、そして窓越しの小さな池にも在った。訪れた人々は怪訝な眼差しで銀の物体を見つめ始める。どう観ても元々この場所に存在したものには思えないが、不思議と空間に収まっている気もする。個々の形は似通っているものもの同じものは無くソワソワさせる。物体を追うように歩みを進めると周りの空気が少しずつ動き始める。

「小舟によせる唄」展より



してあった「速さの価値」について、認識が変わったように感じられました。

さらにコロナ禍の現在の状況にも重なります。「不要不急」の外出はしない、ソーシャルディスタンスを保つこと。それらを要求されて初めて、今までどれほど多くの人々と交流を持ち、触れ合っていたか、気づかされたこともまた、私達が普通だと思っていた日常に対する意識が変化した一例でしょう。二人の作品を前に、そんなことにも思いをはせたくありません。コロナによって人との直接的な交流が減り、自己と向き合う時間が増えた私達は、より一層その姿勢に共鳴するよう感じられます。

北川、李には展示するスペースを自ら決めてもらい、そこから新作の制作を依頼しました。二人が選んだのは成羽美術館の特長である、自然光の入る場所—北川は屋外と多目的展示室、李は静水の庭とロビーでした。

天気や時間帯によって表情が変わる作品群は、まさに作家の思惑通り、情味のあるものとなりました。「雪が積もればいいのに」と話した矢先、大寒波で雪が積りました。雪化粧を施した北川の作品は、ずっと前からそこに存在していたかのような安定感で、精霊のような気配をまとうせていました。李の作品が設置してある静水の庭は白く染まり、静寂の中、李の作品「イノチ舟」は航海を一旦休めて、ゆったりと雪を眺めているかのようでした。

展覧会関連イベントとして、開幕初日の12月12日(土)に作家によるギャラリートーク、12月19日(土)には舞踏家の森真保さんをお招きして舞踏「空(Kū)」を開催しました。

本展覧会開催に際しまして、ご協力いただいた方々にはこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

**児島虎次郎を偲ぶ
絵画コンクール**
2021年1月9日「土」―2月7日「日」



【ポスター】成羽中学校3年
三村真奈美さんの作品《花と猫》

令和2年度は、市内小中学校20校から1205点の応募がありました。今年も故郷の風景やペットなど様々なテーマで描かれた力作揃い。審査を経て、各学年の最優秀賞にあたる「児島賞」、次点の「渡辺賞」などの受賞作品を含む198点が選出。個性豊かな作品たちが展示室に並びました。1月20日(水)には隣接のたいこまるプラザにて表彰式を開催し、受賞者へ小田幸伸教育長より賞状と記念品が贈られました。また、本年度は児島虎次郎の曾孫で洋画家の児島慎太郎氏が各作品の講評を行い、受賞者は熱心に耳を傾けていました。児島賞・渡辺賞受賞者は次の通りです。(敬称略)

【児島賞】
金高奈々海(川上小1年)、藤原永吉(富家小

2年)、川上菜鈴(川上小3年)、石田菜月(成羽小4年)、宮田智恵(松原小5年)、平松葉(松原小6年)、池田愛子(川上中1年)、森下和弥(高梁北中2年)、三村真奈美(成羽中3年)

【渡辺賞】

原田珠里(富家小1年)、常清歩花(有漢東小2年)、中山瑛菜(高梁小3年)、加藤優桜(有漢東小4年)、白木優衣(成羽小5年)、宗岡勇利(成羽小6年)、鈴村俐奈(成羽中1年)、榎千智(川上中2年)、大月深琉(有漢中3年)

**新型コロナ対策&
おうちミュージアム**

2020年、世界で猛威をふるった新型コロナウイルス。4月、感染が拡大し緊急事態宣言が発出されたことに伴い、特別展「児島虎次郎―もうひとつの眼」が開幕したばかりでしたが、同月10日より5月7日まで臨時休館することになりました(その後休館期間は5月11日まで延長)。その影響で夏に開催を予定していた特別展「坂村真民の世界」も中止。

臨時休館中、おうちにいながら成羽美術館に触れていただくべく、まずはツイッターで「児島虎次郎―もうひとつの眼」の列品紹介をスタートさせました。ナビゲーターとしてディプロカウルスくん



「すいー」
おうちワークショップの他、ギャラリートークの動画なども随時追加しています。ぜひチェックしてみてくださいね。

(ペルム紀前期の両生類。ニックネームは「すいー」というキャラクターも誕生しました。また、おうちでできる化石ワークショップ(動画)を制作しYouTubeにアップ。当館ホームページで、動画やコラムなどオンラインで楽しめるコンテンツをまとめた「おうちミュージアム」も展開しました。

休館期間終了後も密を避けるためイベントを中止・変更したり、マスク着用、検温、除菌作業といった感染拡大防止策を講じたりますなど、コロナへの配慮が最優先される日々が続きます。安心してお客様に美術館で過ごしていただく工夫を今後も考えていかなければなりません。

成羽美術館では、下記のような対策で新型コロナウイルス感染症拡大防止に努めています。ご来館のお客様にもご協力いただけますようお願いいたします。また、パソコンやスマートフォンでご覧いただける当館のコンテンツをご紹介します。



おうちでできる化石ワークショップ(動画)
「化石風レリーフをつくろう!」

おうちミュージアム



FOLLOW US /
高梁市成羽美術館
オンラインコンテンツ

YouTube



facebook



twitter



Instagram



LINE



新型コロナウイルス感染症対策へのご協力をお願い

- ・ご来館の際はマスクの着用、咳エチケットの遵守をお願いいたします。
- ・受付で氏名、連絡先の記入をお願いいたします。
- ・手指用消毒液を設置していますので、ご利用ください。
- ・展示ケースなどには触れないようにご鑑賞ください。
- ・他の人との距離を保ってご鑑賞ください。